人口減とAI・ロボ活用「自動化進んでも人の役割大きい」

人口と世界　英オックスフォード大教授 オズボーン氏

2021/12/16 11:00 | 日本経済新聞　電子版

――「米国の仕事の47%は機械で代替可能」という2013年の論文指摘は、世界に衝撃を与えました。

「当時よりはるかに不確かな時代になった。人工知能（AI）の分野を中心に、テクノロジーは進化を続ける。オンライン会議から食料品の配達に至るまで、自動化の流れも新型コロナウイルス禍で進んだ」

「多くの人が自動化が考えていたほど悪くはないことに気づいた。一方で、人と人との接触機会が減ったことで、資金不足からイノベーションの減速やAIへの期待感がしぼむ可能性はなお残っている」

――想定ほど「置き換え」は進んでいないと。

「ロボットが奪う仕事もあれば、ロボットが生み出す新しいタイプの仕事もある。47%はあくまで自動化への技術的な可能性だ。予測でも実情でもない」

――人口減時代のロボットやAIの役割は。

「テクノロジーはあくまで、私たちが望む目標を達成するために社会として採用するものだ。では少子高齢化のなか、あらゆる分野でその活用余地や必要性があるのかどうか」

「介護の現場で技術をうまく活用できていないという指摘がある。他方、高齢者が求めるのは社会に溶け込むことや人といきいきと話すこと。こうした機能は機械にない。置き換えることはできないものだ。今日の高齢化への解決策には、有益というより有害な部分も多く含まれている」

――適した仕事と適さない仕事がありますね。

「どの仕事をテクノロジーに任せるのか注意深く選ばないといけない。人間の尊厳を傷つけず、かつ人間にとって退屈な仕事は置き換えが有効だろう」

「例えばロボットに介護施設までの運転や輸送を任せる。そうすれば高齢者は家族と気軽に会える。ネット通販の世界では、発送管理や商品のお薦めがアルゴリズムは得意だ。コールセンター業務の開発も進んでいる。役割分担によって生産的な社会へと変革していく余地は大きい」

――私たち個人もテクノロジーへの向き合い方が問われる時代になります。

「人々は自動化でその仕事すべてが置き換わると本当に考えるのだろうか。例えば介護の現場では、ロボットの導入は仕事の一部を補うという感覚に近い。大げさに物事をとらえるべきではない。人の力とロボットの強みの双方を把握し、手を取り合って働く状態こそ理想だろう」

「無論、そのためには自動化ソリューションの設計・実装に人が深く関わることが欠かせない。これまでの失敗例を見るとほとんどの場合、経営側が最前線の働き手と協議なしにいきなり自動化を進めたケースだった。将来を見据えたとき、人しか持ち得ない労働力の余地はなお大きい」

Michael Osborne　専門は機械学習。英オックスフォード大リサーチフェローなどを経て2019年から現職。13年の共著論文「雇用の未来」で技術と雇用を分析した。

（聞き手は杉浦恵里）

【「人口と世界」第2部・新常識の足音　記事一覧】
(1)移民なき時代、世界で人材争奪　「低賃金で来ず」常識に
(2)公的年金限界、万国の悩み　若者急減で老後資金は自助に
(3)AI、脅威論越えヒトと共生　9700万人雇用生み成長率2倍
(4)「おひとりさま」標準に　世界で3割増、官民で孤独克服
(5)「人口減で貯蓄過剰」ケインズの予言　投資促す政策に解

クリックするとビジュアルデータへ

人口と世界
変わる多数派 常識が揺らぐ

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.